

同一法人内事業所連携の強み ～看取りを通じた多職種連携～

筆頭演者：滝澤 直樹

共同演者：大月 博

筆頭演者職種：相談業務、介護職員

所属施設名：株式会社 アール・ケア

サービス付き高齢者向け住宅

ハーヴィスヒルズ

Key word：看取り、同一法人、多職種連携

<はじめに> 介護保険では、いわゆる“囲い込み”には問題があるとして、居宅介護支援事業所が同一法人の他サービスを一定割合以上導入した場合には集中減算を科している。今回は、この制度の実効性に反し、同一法人内事業所連携の優位性が示唆された看取り事例を紹介する。

<事例紹介> A氏・87歳・女性・要介護1で、当社サービス付き高齢者向け住宅へ入居。同年●月●日、急性腰背痛を主訴として玉野市民病院を受診。検査の結果、膵臓癌（多臓器転移、余命3ヶ月）と診断され、同時に要介護5への区分変更を受けた。

<本人の選択と本人・家族の心構え> 家族はA様へは診断結果の告知をせず、馴染みの環境で穏やかに最期を迎えさせてあげたいという希望があった。そこで、サ高住での最期を支えるためのサービスを至急整える方向で多職種協議が開始された。

<結果> 日々心身の状態が変化していく上で密に関するサービスを選択することが課題となった。また、ケアマネジャーより同一建物にある事業所は細かな変化へも対応可能という期待が寄せられていた。実際に、事業所が同一法人、建物にあることによって情報共有については24時間体制で行う事ができ、他社との連携よりも頻回な打ち合わせの下、満足される看取りができた。

<チーム構成> ご家族、訪問看護（自社）、定期巡回・随時対応型訪問介護看護（自社）、サ高住（自社）ケアマネジャー（他社）、医師（他院）、福祉用具（他社）であった。

<考察> 医師は別として看取りを中心的に支援する訪問看護と定期巡回・随時対応型訪問介護看護に加え、サ・高住の運営が同一法人、さらには2事業所がサ・高住内の同一フロアであった。当日は主に、多職種連携における一連の環境の有用性を報告したい。

同一法人内事業所連携の強み ～看取りを通じた多職種連携～

はじめに

介護保険では、いわゆる“困り込み”には問題があるとして、居宅介護支援事業所が同一法人の他サービスを一定割合以上導入した場合には集中減算を科している。今回は、この制度の実効性に反し、同一法人内事業所連携の優位性が示唆された看取り事例を紹介する。

事例紹介

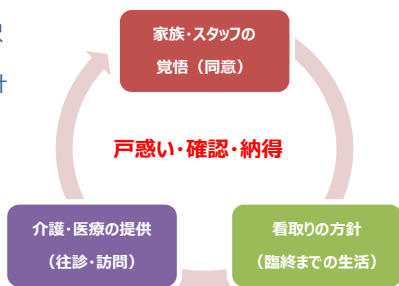
A氏 享年87歳 女性

平成27年、要介護1で当社のサービス付き高齢者向け住宅へ、穏やかに過ごされていた。同年、急性腰痛を主訴として近院を受診。検査の結果、膵臓癌（多臓器転移、余命3ヶ月）と診断され、同時に要介護5への区分変更を受けた。

家族の希望により、病名（余命宣告）は本人には申告せず、家族にも強い戸惑いはあったが、看取りに向けたケアが開始された。

ターミナルケアの構成因子

1. 本人、家族の意向確認
2. 終の棲家の選択
3. 今後の治療方針
4. 緊急時の方針
5. 生活を支えるサービスの選択



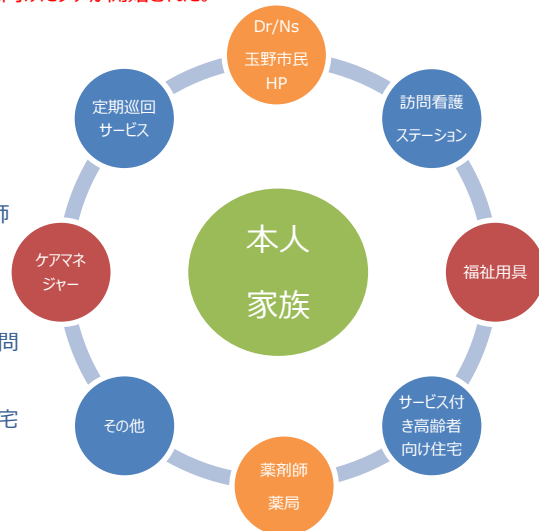
チームの構成

・本人 / ご家族

【他社サービス】
 ・病院：Dr / Ns / 薬剤師
 ・ケアマネジャー
 ・福祉用具事業所

【自社サービス】
 ・定期巡回、随時対応型訪問介護看護
 ・訪問看護ステーション
 ・サービス付き高齢者向け住宅

【その他】
 ・食事業者：栄養士



看取りにおけるニーズ

【家族の要望・希望】

- ・馴染みの環境で落ち着いた最期を迎えさせてあげたい。
- ・本人の状態変化に対して、密に関われる環境を準備したい。
- ・日々変わる状態に随時対応できる柔軟なサービスを取り入れたい。

【自社サービスの利点、多職種連携の有用性】

- ・自社ならではの24時間体制での柔軟な対応が出来た。
- ・事業所間で垣根のない関わりができる。
- ・利用者との密な関係が日頃から築けていた安心感があった。
- ・専門職としてのアドバイスが多職種連携の強みを生んだ。
- ・医療機関との情報共有が密に行えた。
- ・日々の変化への対応が迅速に行えた。

こういった背景を基に利用者の心理からすれば、普段より密に関わりのある事業者は選ばれやすい傾向にあるのは必然的とも考えられる。

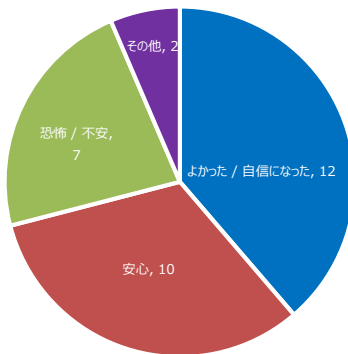
考察 / まとめ

一般的に、「過剰なサービス」や「サービス利用の強要」等で“困り込み”には問題があると言われているが、本ケースでは“困り込み”から発生する問題よりも、事業所連携、多職種連携が生み出す効果の方が圧倒的に大きく、在宅における「終の棲家」を実現させていく上では、その合理性と対応力で大きな成果を上げた。さらには、これが起因し家族からの安心感もより大きなものとなった。

今後は、高齢者の増加、多死、そして労働力の低下が懸念される時代に入ります。現在よりも効率的で質の高い看取りが求められる中、近隣、ないしは同一法人のサービス連携は欠かすことができない。

今回の報告が、その時代背景におけるケアのあり方の参考となれば幸いである。

看取りを経験したアンケート回答
 (職員14名に実施 ※複数回答あり)



● よかった / 自信になった ● 安心 ● 恐怖 / 不安 ● その他

アンケートでの意見

【良かった / 自信になった】

・これまでの自事業所だけの取り組みではなく、**事業所の垣根を超えた関わりで大きな連携の力を生み出した事**は今後の医療・介護の新たな方針にも思えた。

・利用者の「最期」にスタッフがしっかりと向き合う事で想いに寄り添ったケアが出来た。

【安心】

・多職種での連携が構築されていく中で、分からないことに対して各専門職が指示、提案してくれる状況に安心できた。

・病状の変化を医師や看護師から逐一教えてもらった事で**家族もスタッフも徐々に看取りに向けて準備が出来た。**

・利用者の**変化を各専門部門ごとに情報を共有した事**でスムーズな連携が生まれた。

【恐怖 / 不安】

・人が亡くなる事への**不安、戸惑い**があり自分たちに何が出来るのか、自分たちがしている介助は正しいのか。

・日々**変化していく状況**に対する**恐怖、不安**が大きかった。

【その他】

・ターミナルケアでは、記録や連絡手段等システム面においては通常時以上の連携が求められ課題が残った。